聖霊に満たされて　　使徒 2 章 1-13 節

本日の聖書箇所は、ペンテコステの出来事について書かれています。 ペンテコステとは、主イエスがお生まれになったクリスマス、そして十字架の後の復活を記念するイースターと並んで、聖霊が降り、教会が誕生した日として、キリスト教が最も大切にしている日の一つです。ペンテコステは、世間ではクリスマスやイースターほどには知られていません。「ペンテコステ」というのはギリシャ語で、五十番目、五十日目という意味です。ペンテコステは、元はユダヤ教のお祭りの日で、「五旬祭」といいます。 ですから聖書に五旬節の日と書かれているのはお祭りの日ということです。「五旬祭」は、過越の祭りの翌日から七週目、つまり五十日目に行われるので、そのように言われています。ユダヤ教では、「過越の祭り」「五旬祭」「仮庵の祭り」という三つの祭りが、ユダヤ人の男子がエルサレム神殿に巡礼しなければならないと決められている、三大祭りでした。

主イエスが十字架に架けられたのがユダヤ人の「過越の祭り」の時でした。そして十字架の死からよみがえられ、使徒たちに現れて、天に上げられるまでが四十日間でした。その後、使徒たちは主イエスが天に上げられる前に 1：5 で「あなたがたは聖霊によるバプテスマを受ける」と約束して下さったことを、集まって祈りながら待っていました。 そうして十日が経ち、ちょうど「五旬祭」の日に、その約束の出来事が起こったのです。約束の聖霊が、一同の上に降ったのです。それで、キリスト教の教会では、聖霊が降った日のことを「聖霊降臨日」と言ったり、「ペンテコステ」と呼んで、感謝し、記念する礼拝をささげるのです。

さて、五旬祭の日、何が起こったのでしょうか。使徒たち、そして主イエスを信じて従う人々は、一同が一つになって集まり、主イエスが天に上げられた後、ずっとお祈りをして、約束の聖霊を待っていました。2 節に「彼らのいた家全体に」と書かれているので、みんな一緒に家の中にいて、座っていたのでしょう。「突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。」とあります。それは突然やってきました。激しい風と聞いて、わたしたちは台風を思い出すかも知れません。空から風が吹き付ける唸り声のような音と、風の強さで戸や窓をたたく激しい物音、家が飛ばされるのではないかと思うような風の音が思い出されます。しかし、これは風ではありません。「風が吹いているような」音とあるように、この天からの音は聖霊が来られる「しるし」として聞こえたものです。風は、旧約聖書で神の霊がおられることを表す時に用いられる表現です。聖霊なる神は、はっきりと一同に、ご自分が来られたことを知らせて下さったのです。そして耳で聞こえる「しるし」の次は、目で見える「しるし」です。「炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。」とあります。これは中想像するのが難しい情景ですが、火や炎も、神がそこにおられるしるしとして、旧約聖書に登場します。

聖霊なる神を目で見ることはできません。しかし、ペンテコステの日には、神が確かに働かれ、そこにおられ、聖霊が一人一人に授けられるということが、耳で聞いて、目で見て知ることが出来る、外からの「しるし」によって、はっきりと示されました。炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人のもとに、聖霊が来て下さったのです。続けて「すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しだした。」とあります。 この「他国の『ことば』」という単語は、3 節の「炎のような分かれた舌」という単語と同じ単語です。「ことば」と「舌」。炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人にとどまり、〝霊〟は「他国のことば」を語らせました。聖霊は、「ことば」を語らせるのです。

1：8 で、「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と主イエスが言っておられました。聖霊に満たされて人々が語ったことは、主イエスを証しする言葉です。聖霊は神ですから様々に顕れますがその中心となるのは主イエスの十字架と復活の出来事を証しするということです。「聖霊に

よるのでなければ、だれも、『イエスは主です』と言うことはできません」コリント第一 12 章 3 節

このように神が聖霊によって力をお与えになり、いよいよ地の果てまで、主イエスの証言が宣べ伝えられる時が来たのです。そして人間が神に遣わされて、神の御業に用いられる時が来ました。集まって祈り、備えていた者たちが、語り始めました。ですから教会とは何か？と言うなら聖霊によって誕生した、主イエスの救いの業を宣べ伝える共同体ということです。そしてペンテコステは「教会の誕生日」とも言われているのです。教会とは聖霊によって、力を与えられ、共に救い主なるイエス・キリストを証しする群れなのです。

さて、そのような出来事が起きて、エルサレムに大きな驚きと動揺が広がりました。5 節には、「エルサレムには、敬虔なユダヤ人たちが、天下のあらゆる国から来て住んでいたが、この物音が起こると、大ぜいの人々が集まって来た。」とあります。ちょうど五旬節の時でもあり、いつもは他の地域に住んでいるユダヤ人や、ユダヤ教に改宗した異国の人など、神を敬う熱心なユダヤ人たちが、巡礼のためにエルサレムに大勢集まっていました。聖霊が降ってきた時の激しい風の吹くような音は、みんなを驚かせました。そして、何があったのか確かめようと、この使徒たち一同が集まっていた家の辺りに様子を見にやってきたのです。聖霊を受けた使徒たちや一同はおそらく、家の外に出たのでしょう。そして、霊が語らせるままに、「それぞれ自分の国のことば」すなわち集まってきた人たちの出身のことばで話しだしたのです。そうすると「彼らは、それぞれ自分の国のことばで弟子たちが話すのを聞いて、驚きあきれてしまった。」のです。わたしたちも、海外に行って、そこの地元の人が急に日本語で語りだすのを聞いたら、やはりビックリすると思います。（グランドキャニオン観光での経験）別の意味でショックでした！

ここでは、いろんな国からやってきた人々が、それぞれみんな、自分の故郷の言葉を聞いたというのです。彼らは驚き怪しみました。思わず「いま話しているこの人たちは、みなガリラヤの人ではありませんか。それなのに、私たちめいめいの国の国語で話すのを聞くとは、いったいどうしたことでしょう。」 と言ったのです。それは当然でしょう。そして聖書には、そこに集まった人々が、どのような国からやってきたかが述べられています。 パルテヤ人、メジヤ人、エラム人、・・またメソポタミヤ、エジプトとクレネに近いリビヤ地方まで。多くの地名が出てきます。そして大事なことは、これらの地名は、当時知られていた世界のほとんどすべての場所だということです。それは 5 節で「天下のあらゆる国から」と表現されていることからも分かります。つまり当時の人が知りうる限りの、全世界のあらゆる国から来た人がエルサレムに集まっており、それぞれの国の言葉で、神の偉大な業を聞いた、というのです。

聖霊が語らせた言葉は、多くの人々に驚きと、怪しみと、戸惑いを引き起こしました。その出来事はただ単に、人々が自分の国の言葉を聞いて驚いたというだけではありません。そこであらゆる国の言葉で語られたのは、同じ一つの内容、「神の偉大な業」についてでした。11 節に「私たちのいろいろな国ことばで神の大きなみわざを語るのを聞こうとは。」と述べられています。聖霊の働きによって、あらゆる国の人々に、一つのこと、「神の偉大な業」が語られました。そして言葉は違えど、みな同じことを聞いたのです。「神の偉大な業」とは主イエス・キリストの十字架と復活により、罪を赦し、永遠の命と復活を約束して下さるということです。言葉も住むところもばらばらにされていた人々は、主イエスが送って下さった聖霊の働きによって、共に一つの神の言葉を聞き、主イエスの救いのもとに、再び一つの神の民として集められたのです。それは、わたしたちも同じです。時も国も言葉も違いながら、この時に人々が聞いたのと同じ、神の偉大な業を、わたしたちも聖霊の導きによって聞いています。そして、その言葉をまた、わたしたちも聖霊によって伝えていくのです。

このペンテコステの日の出来事に、人々は驚きました。しかし一方で、聖霊を受けて語る者たちを、「彼らは甘いぶどう酒に酔っているのだ」と言ってあざける者たちもいたのです。不思議な出来事に驚いて

「どういうことなのか」と問いを持つ者もいれば、ばかにして笑う者もいたと言うのです。しかし事実、このようなことは、わたしたちの今の世界でも、同じことが起こります。起こって当然です。「神の子が人となって、十字架で死んでよみがえられた」という福音は、人間の理性で理解することは不可能です。どうして、世界を造られた神の御子が、弱い人間となって馬小屋でお生まれになるのでしょうか。どうして、神の御子が、辱めを受け、苦しみ、十字架という不名誉な死に方をしなければならないのでしょうか。それが、私の罪を赦すためであったとはどういうことでしょうか。そして死んだ方が、復活させられ、そのことによって私も復活するということがあるのでしょうか。当時の人は心が素直だったから疑わないで信じたのでしょうか？　そんなことはありません。宗教改革者のルターは、このように言っています。「世は聖霊の賜物を見もせず、理解もせずに、逆に、あざけり侮辱します。実際、私たちの主が言われたこと、語られたことは、すべてこの世に合わず、合わせることもできないのです。」それは、よく考えてみれば当然のことです。神が行って下さった救いの御業は、わたしたち人間の理解も、想像も、遥かに超えている、驚くべきことだからです。しかし神は、その驚くべき救いの御業を確かに行って下さいました。神に背き、罪と死に捕らわれたわたしたちを、神は憐れみ、愛して下さったからです。

主イエスについて語られる証も、聖霊の御業も、ある者には驚きと戸惑いを与えるものであり、またある者にとっては、あざけるような事として捉えられます。神の御業は、人の思いを遥かに超えているのです。だからこそ、わたしたちには聖霊の導きが必要なのです。主イエスが送って下さった聖霊の助けによって、神の御業を聞き、知ることができるのです。そして聖霊の助けによって、主イエスを信じると告白し、また証しする者となることが出来るのです。私は伝道出来ない。それには召されていない。・・それはあなただけが特別なのではありません。誰にとっても至難のわざです。恐れで一杯になって当然です。だから聖霊が来てくださったのです。諦める前にどれだけ聖霊に働きにより頼み、祈ったことでしょうか？

4 節で、「みなが聖霊に満たされ」と書いてあります。考えてみると外から来るものに満たされるためには、受け入れる器の中身は空でなければならないと思います。どうして彼らが聖霊に満たされることになったのでしょうか？　それは彼らが聖霊を迎えるために祈って待っていたことが大きな要素として言えるのではないでしょうか。自分の思いや願いで頭と心の中が一杯では聖霊に満たされようがありません。自分を空にして、神から与えられるもので満たされるために祈りをもって備えが出来ていたのです。そして、天から下った聖霊に満たされて、新しい言葉を語らされたのです。あなたという器には、内から起こってくる様々なもの、願いや思い、他人への恨みや不満、自分の出来もしない夢や願いで満ち溢れてしまって、聖霊が働きにくくなっているということはないでしょうか。わたしたちが神の前で、本当は自分自身を満たす良いものを何も持っていないことに気づく時、神は最も良いもの、罪の赦しと、神と共に生きる命と、永遠の喜びを、わたしたちの内に豊かに注いで下さるのです。

聖霊は一人一人に働いて下さいます。一人一人を満たして下さいます。しかし、一人で主イエスを信じ、一人で主イエスの証人になるのではありません。聖霊が来られた時、聖書は皆が一つになって集まっていたところに、降って来られたと書かれています。皆が一人の主イエス・キリストのもとで一つになっていたからです。それぞれが主イエスにあって、共に結ばれて、約束の聖霊を受け、主イエスを証言する者の共同体。それが教会です。

ペンテコステの出来事は、このように、主イエスを証する群れである教会の誕生と、一人一人に与えられる聖霊の働きと恵みを伝えています。わたしたちも、一つになって聖霊の助けを祈り求めながら、教会から遣わされて、この新しい一週間、一人一人に与えられた聖霊の助けによって、主イエスを証しして歩んでいきましょう。そのように歩むなら神様はいくらでも必要を満たし、力を与えて下さいます。